

公開クリスマス礼拝

羊飼いのクリスマス

学院長・宗教総主事 佐々木 哲夫

¹ 主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。

² 主はわたしを青草の原に休ませ

憩いの水のほとりに伴い

³ 魂を生き返らせてくださる。

主は御名にふさわしく

わたしを正しい道に導かれる。

⁴ 死の陰の谷を行くときも

わたしは災いを恐れない。

あなたがわたしと共にいてくださる。

あなたの鞭、あなたの杖、

それがわたしを力づける。

⁵ わたしを苦しめる者を前にしても

あなたはわたしに食卓を整えてくださる。

わたしの頭に香油を注ぎ

わたしの杯を溢れさせてくださる。

⁶ 命のある限り

恵みと慈しみはわたしを追う。

主の家にわたしは帰り

生涯、そこにとどまるであろう。

詩編 23 編 1-6 節

⁸ その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。⁹ すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。¹⁰ 天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。¹¹ 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。¹² あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」¹³ すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

¹⁴ 「いと高きところには栄光、神にあれ、

地には平和、御心に適う人にあれ。」

¹⁵ 天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知られてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。¹⁶ そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。¹⁷ その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。¹⁸ 聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った。¹⁹ しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。²⁰ 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話だとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰つて行つた。

ルカによる福音書 2章 8-20節

★

最初のクリスマスの夜。真っ暗な空に星が輝いています。荒れ野の羊飼いに天使が現れ、「きょうダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった」と告げます。そこに天の大軍が加わり「いと高き所には栄光神にあれ、地には平和御心に適う人にあれ」と賛美します。羊飼いたちは非常に驚きます。彼らは、「さあ、ベツレヘムへ行こう」と話し合います。この「さあ」は翻訳されないこともある弱い表現ですので、おそらく羊飼いの気持ちは驚きつつも冷静だったと推察されます。やがて質素な飼い葉桶に寝ている乳飲み子を見つけます。メシアの誕生です。彼らは神をあがめ、賛美し、イエスと出会い、クリスマスを祝ったのです。これが最初のクリスマスの場面です。

★★

ところで、2022 年の私たちにとって、羊飼いは遠い世界の人々に思われますが、実は私たちに身近な存在です。三つほど例を挙げたいと思います。

第一の例は絵本や童謡に登場する羊飼いです。オオカミが来たと嘘をつくイソップ物語の少年は羊飼いでいた。また、マザーグースの歌「メリーさんの羊」は Mary Had a Little Lamb ですから、生後 1 年未満の子羊です。メリーさんは子羊の羊飼いです。また睡眠のために「羊が一匹、羊が二匹…」と数えるならば、その方は頭の中に登場する羊の羊飼いになっています。

第二の例は歴史的人物です。19 歳の娘が神の啓示を受けてフランスのために戦いイギリスに勝利しました。15 世紀のヒロイン、ジャンヌダルクです。彼女は国王から群れを守る羊飼いと呼ばされました。13 世紀の蒙古の英雄ジンギス・ハーンも牧畜の民でした。旧約聖書の人物、モーセ、ダビデ、預言者アモスも羊飼いでした。

第三の例は教会です。プロテスタント教会では、教職者を牧師と呼びます。牧師はラテン語の「牧者(羊飼い)」に由来しています。このように羊飼いは私たちの身边に存在しています。また私たちは、詩編 23 編に描かれている羊飼いの姿を知っています。

★★★

詩編 23 編を読んでみます。冒頭で詩人は、「主は羊飼い」と宣言します。羊には何も欠けることがないとも断言します。完全な羊飼いです。「欠けることがない」はどのようなことか。続けて描写しています。

青草の原に休ませ／憩いの水のほとりに伴い
魂を生き返らせ／正しい道に導き／死の陰の谷を行くときも恐れない。
あなたの鞭、あなたの杖がわたしを力づける

羊飼いが持っている鞭の付いた杖は、無論、狼や盗人たちに向けられるものです。守るだけでなく、さらに、食卓をも整えてくださる。頭に香油を注ぎ、杯を溢れさせてくださると歌います。羊飼いと共にいることを詩人は、「主の家にわたしは帰り、生涯、そこにとどまるであろう」と歌います。

ところで、イエスキリストは、自らが牧者であると言っています。新約聖書に次のように記されています。

わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。
(ヨハネ福音書 10 章 14-15 節)

人々は、羊飼いの話を不思議に思いましたが、私たちは、イエスキリストが十字架の死に至るまで、羊飼いであったことを知っています。

★★★★★

最初のクリスマスの空にあふれんばかりの星が輝いていたことでしょう。私たちのクリスマスにおいても、キャンパスのイルミネーションやショウインドウの飾りなどたくさんの光が輝いています。それは、イエスキリストによる新しい時代の希望を象徴する輝きです。クリスマスの希望は、永遠の希望です。ヴィクトール・フランクルは著書『夜と霧』のなかで、真の希望について次のように証しています。

人が自分の心を没落するにまかせたのはいつでしょうか。それは、心の支えがなくなった時です。この支えには、二つのものがあります。支えが将来にあるか、永遠にあるかです。永遠にあるというのは、宗教的な人たちの場合で、強制収容所で生き延びる、解放されるという無理な要求を将来の運命に負わせなくとも、気持ちをしっかりもつていることができたのです。

最初のクリスマスの夜に飼い葉桶に寝ている乳飲み子のイエスキリストは、希望の光でした。それは、2022 年のクリスマスにも光り輝いています。

(2022 年 12 月 23 日)